

## 智顓と王朝の交接

坂本道生（叡山学院）

中国における王朝と仏教の関係をみると、仏教は中央集権国家の下に従属し、王朝や皇帝の保護を受けながら拡大発展していったと言えよう。その一方で、仏教は異国の宗教であるがゆえに、国家権力による法難を被り、あるいは国家から僧尼たちの生活に対して規制が加えられることもあった。

本発表では、天台智顓（538～597）を取り上げ、彼の実践、特に王朝や皇帝に対する働きかけ、あるいは王朝・皇帝から智顓に対する働きかけは如何なるものであったのかを検討したい。智顓を取り上げるのは、南朝の陳とその陳を北方から攻略して中国統一を果たした隋の二朝と関わりがあったからであり、一般的に南朝では宋代以降、皇帝により仏教は保護され優遇されていたと見られるのに対して、隋は北周を篡奪した楊堅によって建国された王朝であり、北周の廢仏の後、一転して仏教復興政策を推進したとされる。すなわち、梁武帝が「皇帝菩薩」と呼ばれた如く皇帝が崇仏してきた立場と、北魏以来の「皇帝如来」の思想のもと皇帝が仏教信奉の姿勢をとる立場、それぞれの王朝・皇帝に対して智顓はどのような教化態度をとったのか、その異同についても考察を試みたい。

さて、智顓は「大蘇開悟」の後、三十歳のとき陳都金陵に移り『法華経』題目の講説や禪の弘通などに努めるも、やがて都における教化活動から身を引き天台山への入山を決意する。入山後も陳宣帝から優遇を受け、同時に都で教化活動するよう要請を受け続ける。その後至徳三年（585）、智顓四十八歳の時、陳後主と永陽王（陳伯智）の要請により、再び金陵に向い、後主とその皇后沈氏にも菩薩戒を授け、『法華文句』や護国經典の『仁王経』の講説を行ったのもこの時期である。

また、開皇九年（589）に隋が中国を統一してからは、文帝と揚州総官に赴任した晋王広（後の煬帝）が智顓に帰依している。開皇十一年（591）、晋王広に菩薩戒を授ける際に、智顓は「四つの願」なる条件を提示し、そこには「たとえ晋王広であっても仏法の為なら忌憚のない意見を申す」ことなどが記される。その他、晋王広に送った遺書の「六恨」（六つの後悔）には「荊州における法会が官人によって中止され、法を伝える機会を失った」ことなどが記される。

これらから、智顓は単に王朝に随順していたわけでは無く、北周の廢仏を認知していた立場から、いつ豹変するか分からない皇帝の態度に恐々としながらも皇帝に仏教の理念を伝えることによって国家全体をより正しい方向に向かわせることを願っていたと言えるであろう。

一方、王朝からの働きかけはどうであろうか。江南仏教界の第一人者たる智顓の指導的立場は、陳隋両朝とも決して無視することは出来ず、智顓に崇拜の念を起こすことは人民統治の点からすれば有効であったに違いない。しかしながら、両朝における信仰はただ表面上だけのものであったのであろうか。例えば、晋王広の「受菩薩戒疏」や「王答遺旨文」などには敬虔な崇仏者としての人民愛護の誓願が見られるのであり、この点については、さらに資料を整序して考察を試みたい。

<キーワード> 智顓、陳、隋、晋王広